

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3 年計画の 1 年目)

1. 研究課題

生と創造の探究—環世界の人文学

Exploring Life and Creativity—the Studies of Umwelten

2. 研究代表者氏名

藤原辰史・石井美保

Tatsushi FUJIHARA, Miho ISHII

3. 研究期間

2017 年 04 月 - 2020 年 03 月 (1 年度目)

4. 研究目的

本研究班は、2015 年度から二年間にわたって行われた共同研究「環世界の人文学」の問題意識と成果を受け継ぎつつ、さらなる研究の深化と発展を目指す。本研究班の基底をなす問いは、人間を含む「生きもの」にとって「生きる」とはどのような営みであるのか、というものである。本研究班の課題は、生きものとその周囲の世界との相互作用と不断の変転に着眼しつつ、生命の持続と創造的な変容の過程を探究することを通して、従来の人文学からの脱皮を目指すことである。本研究班では、「環世界」を単なる抽象概念として扱うのではなく、生きもの相互の「あいだ」や「空気」、さらにはそれらの関係の中で生まれる技術や言説など、具体的な事象に寄り添いながら考えることを主眼に据える。具体的な事例の検討と学際的な議論を通して、本研究班は、無文字の知も含めて生きものとしての人間が培ってきた「生き抜くための知」を多角的に探究していく。

By focusing on the lives, skills, interactions, and boundaries of both humans and nonhuman beings, this research explores a new field in the humanities. This research project, which is based on both philosophical arguments and concrete case studies, investigates the comprehensive issues concerning life and Umwelten. It tackles various critical topics, such as agriculture, natural and man-made disasters, mining developments, religious practices, illness and care, and scientific technology. Through a thorough investigation of the lives of, and the interaction between human and nonhuman beings, as well as of their unique Umwelten, this project seeks to understand the ‘worlding’ of human beings as a part of life on the planet.

5. 本年度の研究実施状況

2017年3月に終了した「環世界の人文学—生きもの、なりわい、わざ」を引き継ぐ本研究班の初年度である本年度は、各班員による個別課題についての研究報告を中心に例会を開催するとともに、ゲスト・スピーカーを招いた研究会や国際シンポジウムを開催し、人間と非人間的存在の関係、ならびに環世界の形成と変容に関する活発な議論を行った。個別課題研究では、それぞれの事例に基づき、病原菌や動植物をはじめとする他の生物との関係性の中で人間にとっての環世界がいかにかに生成し、変容していくのかという問題についての議論と考察を行った。また、文学・哲学・科学技術社会論の視座から、環世界概念の可能性と限界が考察された。6月には田中(祐)が国際ワークショップ「原爆と医学史」を企画し、科学技術と暴力、歴史と記憶という問題系をめぐって学際的な議論が交わされた。また、11月には建築家の能作文徳氏をゲスト・スピーカーに迎え、建築や住環境という視座から環世界論を問い直す議論が展開された。

7. 本年度の研究実施内容

2017-04-17 趣旨説明・共同研究班「生と創造の探究—環世界の人文学」について 発表者 石井美保

発表者 藤原辰史

2017-05-15 病原菌の歴史・再考—人は知らないものを見ることかできるのか 発表者 田中祐理子

2017-06-05 魂の贈与論—「日本人」の環世界と第三項としての米— 発表者 岡安裕介
NPO 法人・京都アカデメイア

2017-06-19 国際ワークショップ 原爆と医学史／The A-bomb and Medical History 発表者 Ran Zwigenberg ペンシルヴェニア州立大学

発表者 中尾麻伊香 立命館大学

発表者 Shi Lin Loh 慶應大学

発表者 田中祐理子

2017-07-03 眩暈・本能・擬態～カイヨワにおける人間／動物の連続性～ 発表者 近藤秀樹 大阪教育大学

2017-07-22 生物学が語る「人間とは何か」 発表者 伊勢武史 フィールド科学教育研究センター

- 2017-10-02 石井美保著『環世界の人類学』合評会 コメンテーター 岩城卓二
コメンテーター 松村圭一郎 岡山大学
- 2017-10-16 意味の物語から意味生産のダイアグラムへ 発表者 佐藤淳二
- 2017-11-06 日本近代文学の〈リアルな〉動物たちと〈死〉—島崎藤村、志賀直哉、広津和郎—
— 発表者 イリナ・ホルカ
- 2017-11-20 障壁を見つけることから建築を考える 発表者 能作文徳 東京工業大学
コメンテーター 篠原雅武
- 2017-12-18 ライプニッツにおける「絶滅」の思想について 発表者 山崎明日香 日本大
学
- 2018-02-19 立憲制の運用と皇室財産—明治 20 年代の御料地「処分」 発表者 池田さな
え
- 2018-03-09 ミニ・シンポジウム なぜ魚肥を研究するのか？ —近世後期の気候変動と米・
魚肥— 発表者 武井弘一 琉球大学
養殖された近代：五ヶ所湾真珠養殖場の戦間期 発表者 シェル・エリクソン

8. 共同研究会に関連した公表実績

6月19日に公開国際ワークショップとして、ツヴィゲンバーグ・ペンシルヴェニア州立大助教、
ロー・シーリン・慶應大学訪問研究員(当時)、中尾麻伊香・立命館大専門研究員を招き、田中
祐理子助教も参加して「原爆と医学史／The A-bomb and Medical History」を開催した。

10. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数	参加人数				延べ人数			
		総計	外国人	大学院生	若手研究者	総計	外国人	大学院生	若手研究者
所内	1	15 (6)	4 (2)	0	2 (2)	169 (78)	36 (24)	0	20 (20)
学内	1	5 (4)	1 (1)	3 (2)	1 (1)	23 (12)	12 (12)	3 (2)	12 (12)
国立大学	3	3 (0)	0	0	0	21	0	0	0
公立大学	0	0	0	0	0	0	0	0	0
私立大学	8	8 (2)	1 (1)	0 (0)	2 (2)	16 (10)	2 (2)	0	4 (4)
大学共同利用機関法人	0	0	0	0	0	0	0	0	0
独立行政法人等公的研究機関	1	1	0	0	0	7	0	0	0
民間機関	1	1	0	0	0	10	0	0	0
外国機関	3	3 (1)	3 (1)	0	0	12 (5)	12 (5)	0	0
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	18	36 (13)	9 (5)	3 (2)	5 (5)	258 (105)	62 (43)	3 (2)	36 (36)

※()内には、女性数を記載

11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

参加研究者がファーストオーサーであるものを対象

総論文数	13(4)
------	-------

※()内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載

インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合

掲載雑誌	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名
現代思想	4	屑ひろいのマリア	藤原辰史

※拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す

13. 次年度の研究実施計画

次年度の研究実施計画 本年度の研究活動の成果を踏まえつつ、さらに環境と生活実践の相互影響関係について研究を進めていく。前期は本研究班の班員のほかに、人類学者・陶芸家をゲスト発表者として招き、より実践の事例に即した議論を深める研究会の開催を計画している。後期は国内外の研究者を招へいした、シンポジウム形式での特別研究会も含め、これまでの研究を外部にも公開しながら、最終年度に向けた研究の方向性を検討・再調整する機会も設ける予定である。これらすべての研究会と並行して、研究班班員を大きく三つの主題に分けることでそれぞれの個別研究の有機的な関係を明確にし、研究全体を体系的に認識しながら最終年度につなげるよう議論を進める。

14. 次年度の経費

国内旅費	研究会参加費	開催回数 15 回 国内出張旅費(延べ 80 人)	支出予定額 600,000 円
合計			600,000 円

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

研究成果公表計画および今後の展開等 次年度は特に後期に国内外の研究者を招へいしたシンポジウム形式の公開特別研究会を組織し、これまでの研究成果を公開するとともに、今後の共同研究の方向性の検討と再調整の機会とする計画である。またこれを踏まえながら、定期的な研究会を通じて研究班員の個別研究を体系的に組織化し、最終年度にはそれぞれの論文の書籍化へ向けた研究・執筆につながるように準備していく予定である。